

## 書評 上野英子著

### 『源氏物語 三条西家本の世界―室町時代享受史の一樣相』

伊井 春樹

二〇一九年の『源氏物語』に関するニュースといえば、一〇月九日に全国紙、地方紙などで一斉に報じられた定家本「若紫」帖の発見であろう。「源氏物語若紫 定家筆の写本」「源氏物語最古の写本 藤原定家が校訂」などと第一面にカラーの写真入りで報じられ、後の面でも説明がなされる。「朝日新聞」と「読売新聞」では、後日また詳細に解説入りの記事が生まれ、『源氏物語』の伝本とか、その中での定家本の位置づけなどが詳細に語られる。『源氏物語』の写本の書誌情報までが掲載されるというのは、きわめて珍しいことである。

「若紫」一帖の出現に、これほどまでに騒がれるのは、それだけ『源氏物語』の歴史的社会的な存在の大きさと、定家本としては五帖目という希少価値があつての注目なのであろう。これまで「花散里」「柏木」「行幸」「早蕨」の四帖が知られており、いずれも重要文化財に指定されている。それがこのたび、つれの「若紫」帖の新出ということで、人々の強い関心の的となった。

定家本というのは、自筆のほかにも複数の人々が書写し、定家が訂正の筆を加え、巻末に「奥人」が付された形態をと

る（ただし、花散里・早蕨にはなし）。これが定家の青表紙本の原本とされ、全巻揃って伝存していれば、今日の『源氏物語』の本文をめぐる混乱はなかったはずである。

上野英子氏の著作は、鎌倉期の定家本が、その後南北朝・室町期という動乱の世を経ながら、どのように流転して三条西家本の本文として成立し、数代にわたって注釈書が生み出されたのか、その時代背景など、数多くの資料を用い、それらの軌跡を実証的に丹念に追っていく。自問自答するように一つ一つ問題点を剔抉して処理し、また先へと進み、三条西家の存在を説明していこうとする。読む者も、その思考回路をともにたどり、壮大な『源氏物語』本文の流伝史を味わうことになる。各章は独立して発表した論文のようだが、『三条西家本の世界』として組み直し、緊密にするため文章も補入したのである。読む者は大きなテーマのもとに自説を披歴することばの世界に入り込むことになる。

著者も要領よくまとめているように、定家本というのも一様ではなく、複数存在し、揃い本として伝えられているわけでもない。定家が『源氏物語』五十四帖を手にしたのは、『明月記』によると元仁二年（嘉禄元・一二二五）二月十六日、その日の日記に「家中の小女等」によって書写が完了し、表紙をつけ、外題も押したとする。大半は親族の女性や家の女房などが書写した女手だったようで、定家自ら校訂して手を加え、後に藍色の表紙が付されたことから、〈青表紙本〉と称される。定家の所蔵していた『源氏物語』は、かつて建久の頃に盗まれ、それ以降三〇年ばかり、家に〈証本〉はなかった。その長年の念願がかない、このたび五十四帖の〈証本〉が出現の運びとなっただけに、定家には大きな喜びであり、子孫は〈青表紙本〉として珍重し襲蔵するにいたる。

定家は本文の各所に付していた注記を、巻末にまとめたのが『奥入』だが、池田亀鑑氏はこれを第一次本と称した。本文の付箋注や巻末注記が、人に写されて内容の疑義なども評されたこともあり、出家した天福元年（一二三三）以降に定家は巻末を切り取って別冊にして、秘蔵するにいたった。これが第二次本『奥入』となった。

成のため、巻によっては本文の末尾部分も一緒に切り取られてしまった。現存するのは、夕顔、若紫など十四帖、定家はこれらの巻々の原本には、紙を継ぎ足して、失われた本文を補い、仕立て直したはずである。

定家本の大半は長い星霜を経、現存するのはわずかに四帖、そこに新たに加えられたのが五帖目に相当するという若紫帖である。寸法もほとんど重なる、タテ二一・九センチ、ヨコ一四・三センチの、一般に流布する版型の〈四半本〉である。もう一種の定家本としては、巻末を切り出して一帖に仕立てた『奥入』の存在で、そこには夕顔、若紫など十四帖に巻末の本文の一部が残される。こちらはタテ一七・五センチ、ヨコ一七・四センチの枡形本で、〈六半本〉と呼ぶ。なお、〈四半本〉については、上冷泉為和(一四八五—一五四九)の子明融による、桐壺、帚木など九帖の定家本の臨模本が存する。

これら残された資料から、池田亀鑑は本文の巻末に『奥入』が付されている第一次本から、『奥入』だけをまとめた第二次本へ成立したと主張する。冊子本『奥入』が成立したのは出家後なので、当然の考えであるし、さらに池田亀鑑は元仁二年の書写が〈四半本〉に相当するとも想定していたようである。

ただこの成立順には反対の声も多く、『奥入』の内容からむしろ〈六半本〉が先で、第一次本『奥入』を巻末に持つ〈四半本〉の方が後の成立であるともする。もともと判型の違いもあるし、本文そのものも両者では異なりをみせるだけに、定家本とはどちらを指すのか、また別の書写本が存したのか、などと論議は尽きることがない。上野氏はそれらの諸説を詳細に紹介し、青表紙本の本文を追求し、三条西家の本文にどのように反映しているのかをたどっていく。

定家本と対置されるのが、ほぼ同じ時期に出現した河内本で、源光行・親行の親子二代にわたり、建長七年(一二五五)七月に校訂作業を終えるにいたる。二十一部の代表的な古本を参照し、さらに八本の『源氏物語』の写本を取捨選択して河内家の本文を作成したとする。それほどまでに当時は多様な本文を持つ『源氏物語』が流布し、評判の高い作品と

して人々に読まれていた実態も知ることができる。

近代の『源氏物語』の研究において未踏の境地を開き、本文研究において画期的な成果を上げたのが池田亀鑑で、調査した資料は三万冊の伝本、河内本だけでも九〇種に及ぶと回顧する。そこから導かれた結論は、定家の青表紙本がもつとも原本に近く、現存本でそれを継承するのが大島本(現古代学協会蔵)だということである。その膨大な資料にもとづく主張には圧倒されるばかりで、有力な反論もできないまま、戦後の『源氏物語』は青表紙本で読むのが主流となり、さらに近年では大島本のテキストが大半を占めるにいたる。

上野氏も指摘するように、一条兼良は「源氏の本一様ならず、人のこのむ所にしたがふべし」(『花鳥余情』)と、青表紙本、河内本だけではなく、さらに各種の本文が流布するだけに、読者の好みによって選択する余地があった。それが青表紙本と河内本に淘汰され、『千鳥抄』に付された『源氏物語青表紙(定家流)河内本分別条々』のように、二本を分別する風潮が生じ、やがて有力だった河内本から青表紙本を尊重する方向へと世相が変化していく。

上野氏の論で、興趣をかきたてた一つに、応仁の乱の混乱からの古典復興の訪れという、ダイナミックな視点の導入がある。都は焼け野原となり、各種の建造物だけではなく、文化的な遺産も滅びてしまう。そのような中から生まれたのが、いわゆる日本版ルネサンスといってもよい社会的な復興運動で、朝廷の主導による古典籍の収集であった。『源氏物語』も諸本を集め、新しい証本作りとなり、その作業に参画したのが、青春時代の三条西実隆であった。『源氏物語』は貴顕の専有物から、時代の変革とともに読者層は守護大名等の武人、連歌師などの地下層へと拡大し、需要も増大していく。中央から地方への文化伝播といってもよく、その仲介を果たしたのが連歌師たちであった。

実隆は、地下の宗祇・肖柏から『源氏物語』の講釈を受けるといふ、前代までは考えられなかった文化の授受の関係に大きな変化が生じるのが、この時代の特徴でもあった。上野氏はこれらを含め、『実隆公記』を詳細に読み解き、実

隆における古典継承者として、また文化形成の主流として成長していく姿を闡明していく。定家の青表紙本は、混沌とした時代にもよるのであろう、途絶えてしまったともされるが、宗祇は地方で見いだしたのか、その伝本が実隆の手で転写され、三条西家本として成立していくことになる。

宗祇が青表紙本を相伝したという奉公の人〈志多良〉については、素性を知るまでにはいたっていない。宗祇の『種玉編次抄』と『雨夜談抄』に引用される本文は、いずれも非青表紙本であることから、少なくとも文明十七年七月までは定家本を披見していなかったと説く上野氏の指摘は、きわめて興味深い。すると、宗祇が青表紙本を〈志多良〉から相伝したのは、それ以降になるのであろうか。

実隆が五十四帖を二年ばかりかけて書写し終えたのは、三一歳の文明十七年閏三月、その直後に宗祇の『源氏物語』講釈を受けることになる。実隆が依拠した本文は不明ながら、宗祇や肖柏などとの交流により、青表紙本の性格を強めていったようで、以後二〇年余にわたって架蔵本とし、注釈書の作成、講釈等に用いたという。〈文明本〉は永正三年に経済的事情もあって「甲斐国某」に手放した前後、実隆は新しく『源氏物語』四十七帖を購入し、揃い本〈永正本〉が生まれる。後に売却し、大永五年には三度目の書写、これは〈文明本〉に近い本文であった。ただ〈大永本〉も肥後国の鹿子木に宗碩の仲介によって手放し、四度めは享禄二年に息子の公条・公順と本文作りにとりかかり、実隆七七歳の同四年五月に書写を終え、定家本で校合がなされたはずである。この〈享禄本〉はその後中院家が転写し、京都大学図書館蔵として五十二帖〈花宴・葵欠〉が残されるという。

三条西家は四度の『源氏物語』の書写を果たしたとはいえ、現存するのは最後の〈享禄本〉で、日本大学図書館本として現存する。本文の性格としては、定家の〈四半本〉〈六半本〉からも離れた様相を呈するが、花宴巻は肖柏所持定家自筆本と校合したとするので、〈四半本〉を継承した、青表紙本を代表するという大島本に近似するともいう。もう一

本、三条西家証本が宮内庁書陵部に存しており、これはかつて岩波古典文学大系の底本となったが、各帖に実隆の花押が見られるとはいえず、篝火巻以外は寄合書である。永正二年頃の、実隆の初期にかかわった献上本のようで、一面十行書で統一し、和歌は二字下げ二行書き、地の文とは切り離されて書写されるなど、貴顕の依頼による作成だった可能性がある。本文も別本や河内本の混入があり、純正な青表紙本とはかけ離れているとする。もともと〈青表紙本〉とか〈定家本〉と厳密に区別されることなく、混同して用いられるなど、早くからゆれがあったことも指摘する。

上野氏の大きな功績の一つといえるのが、実隆本との対比のために持ち出した新出紅梅文庫本の扱いである。蓬生・若菜上を欠いた五十二帖、列帖装の六半本、一面十行、和歌二字下げ二行書き、そのまま地の文が続くスタイルで、本文は青表紙本である。夢浮橋巻末に転写ながら明応四年邦高親王が実隆本を書写した旨の識語を持ち、具体的に校合することによって失われた文明本の復元が可能だとする。詳細は省くが、紅梅文庫本は〈享禄本〉と共通した性格を持つとともに、そこで訂正された本文が反映され、さらに定家本に近い本文を受け継ぐなど、明応本を復元する位置にある。これらのことから、実隆の〈文明本〉は定家の〈四半本〉に近い存在だったと導く。これらの判断からすると、定家本の復元には、紅梅文庫本がきわめて有力な存在になってくることであろう。

上野氏著書の評価もまじえ、私はかなり定家本の伝来について説明を補いながら紹介してきた。それほど定家の書写本の伝来が複雑で、本文にしてもわずかに残される〈四半本〉と〈六半本〉とによるしか、判断ができないところに隔靴搔痒の思いがする。その両本として本文に違いがあるだけに、判断の基準を定めるのが困難な状況にある。その定家本を視点に据え、実隆によって四度も書写された三条西家本の実態を記録の分析とともに追及し、それぞれの性格と意義を明らかにされた内容は高く評価でき、今後の研究に大いに資することであろう。

定家本はさまざまな伝来の過程を経ながら、〈四半本〉をほぼ忠実に継承しているのが大島本するのが一般的で、上

野氏もその認識のようである。池田亀鑑の膨大な調査結果の影響もあり、大島本は有力な伝本との位置づけとなり、「新編日本古典文学大系」（岩波書店）にいたっては、全面的にそれを底本に用いるという大胆な決断もしている。ただ現実には、数多く残される青表紙本系諸本と大島本とは対立しており、青表紙本の範疇で括ったにしても、とりわけ大島本は孤立した存在である。私個人としては、このあたりで本文の見直しをし、大島本への執着はなくすべきだとは思ふものの、それはともかく『源氏物語』が定家本までしかたどれないのが、何とももどかしい思いはする。

新しく出現した定家本「若紫」も、大島本と本文関係はほど遠く、『奥人』も（四半本）とは異なるなど、まだ本文研究は不安定な状況にあり、決着に至る途上にあると痛感する。三条西家本を見すえながら、果敢に本文研究に取り組まれた上野氏を称賛したい。私は大島本とは別の大きな存在として、三条西家本の見直しを提唱したいところだが、上野氏は書陵部本・日本大学本ではなく、定家の（六半本）との接点が見られる紅梅文庫本を有力視しているようで、それはまた興味深いとも思う。河内本の再評価もあるし、紅梅文庫本をさらにどのように本文史に位置づけるのか、今後の一層の調査が望まれる。

本書について苦言も付しておく、自分の疑問に素直に自答するという論文のスタイルのようで、すでに研究されて既知の事実を要約する部分も多く、繰り返しも気になる。「筆まめな実隆」と評価し、欠落した記述に出会うと、欠けた日記の部分に書かれていたに違いない、などと結論づけていく。日記本文が存する中に見当たらないと、「源氏物語について詳細に記録したわけでもない」と正当化するなど、都合主義との思いもする。さらに気になる表現として、「話を元に戻そう」などとあると、「これは話なのか」と突っ込みたくもなってくる。日常的な俗語も見られるところで、やはり研究書としての風格ある文体は自ら創出すべきでもあろう。

以下は蛇足ながら、三条西家本の流れとして、実隆の（嘉禄本）を中院家で書写していたことは指摘されていた。ほ



かに日本大学図書館には元禄十年書写の、「定家卿自筆、世号青表紙、件写本、三条西家伝来、従三条西前内府通村公写之云々」とする五十四帖が存し、私個人も、図版に示したような奥書を持つ、四半、鳥の子、列帖装、一面一〇行書きの漆塗り箱入りの五十四帖を所蔵する。「中院家本奥書」として、享禄四年の実隆の識語、次いで「同通村公自筆本奥書」と、道村による元和九年の年号を記す。架蔵本は（享禄本）の校訂後の本文を継承する点では大島本や紅梅文庫本と共通する一方、花宴巻では（享禄本）の校訂前の姿もとどめるとか、肖柏本や別本との近似性も見られるなど、きわめて複雑な様相も呈する。

辛苦のともなう研究ながら、三条西家本や紅梅文庫本をさらに調査し、そこから派生した諸本なども視野に入れ、本文の体系化をはかってもらいたいと願うのは、外野にいる者の気ままな思いではある。いずれの日か、写本を自動的に読み取り、池田亀鑑が調査した以上の多様な本文を処理し、新しい概念による分類なり系統が示されてほしいものである。（A5版、242ページ、2019年10月刊、武蔵野書院）

（大阪大学名誉教授）

